雜口集

乾

研古堂樵風著

雞口集

乾坤

紀風輯校

京都帝國大學圖書之印

雞口集序

凡技至其極謂之聖可也楊氏聖於射造父聖於御包丁聖於解牛伯樂聖於相馬史遷之於文少陵之於詩詩文之聖也以我邦言之則道風聖於書雪舟聖於畫利休聖於點茶道策聖於圍棋貫之之於歌芭蕉之於俳俳歌之聖也余嘗

觀芭蕉文集恬澹優游不競不爭不
以滑稽損誠不以諧謔傷氣風流溫藉
自然可慕非唯無一點塵想蓋人品高矣
如其發句亦是化工所致極精極妙有勸
有懲有諷有規洪纖巨細淺深厚薄
從制裁從變唯其意所命故天地所覆
載鬼神所秘惜鉤而出之揭而露之麻非
神寫之景情聖於俳者非邪嗟拘拘儒
者斷斷文人抗顏豎頰苟以釣名競利
爲心者其如何哉江濯纓信奉芭蕉
鑄黃金事之者三十年如一日朝吟暮
詠惟日不足受其衣鉢紹其正脉是
願蓋其所長在滑稽文縱横錯落
馳驟怪駭獨自擅其場雖與恬澹

優游不競不爭者有間其炫爛之極必
至平淡之境我刮目而待之世皺生小竪
吻黄而乳臭者動輒譏之以假字文彈
之以俳諧文寧為雞口勿為牛後與摹
史遷少陵而不成不如學假字滑稽極
其精妙之為勝也蓋自芭蕉氏出
其道大闡以滑稽鳴世者以十數而得

其正脉者鮮矣支考輩傑驁自喜以凌
轢先輩主張門戸與蕉翁背馳也甚
矣安在存其風流其所著文藻文鑒亦
是狡獪伎倆何足以為範而世之無識
徒尊之準如來奉之擬菩薩稱之為
美濃派者百有餘年于茲濯纓其有
慨于斯歟單騎一呼直突其營壘拔

之幟搴之旗左攻右擊不遺餘力至
今其身無完膚不亦快乎余儒生也
資稟庸劣亡論不能增光孔氏其
於詩筆亦不能窺漢唐作者之域究
遷甫精妙之境無益儒門無裨藝
苑蠢然書中一蠹魚得不為牛後乎
嗟經學自標文章自唱者率是僻

見拘說建新角奇綺語媟言欺世盜
俗沾沾自喜不自知其醉生夢死于
大霧中而我輩莫能之矯得不愧
濯纓乎濯纓播之名族家富于財而
以賑恤為心蕉翁所謂其人雖富其
品格不鄙者歟

天保庚子仲春吉備仁科幹題

北越 樸齋書

雞口集卷之上

播磨 趙凡著

醉古堂自序
有馬紀行
惜蓼堀辭
文雅園時雨會序
蘭阪行辯並辭
句帖自序
天橋立眺望紀

題五芳三月月辯
墨巢亭記
恰慈朝辭
良夜行
庚辰秋吟行
辛巳待良夜辯
瞻望搖記
癸未秋吟行
金毘羅参詣紀
桃五句集序

醉古堂自序

自花は人心に成るもむかしは物かなるさるに成
成るとも成成るとも成るに先は成るかなるかなる
ものは成るものは西上人は仏法に行ふ成るに成る
茅とは人のとふらひ烏羊は夕鳥は蒙嶋も
きめるとうの乙女子管中に伊おのの子に成ふ成ふあるこ
童子は成るとも下戸あるは上戸あるは成ふ成るとも
成るとうなるとも成るやみ物かるに色の麗似
る成ふ姫皇は雪は成る果亭は麻るに成る
成ふとふ成ハ晏ふるとも成失ふるとも成るとも

詩を綴りしかたらんとて佛者の跡を尋ねて紀行
王者の王者の詩は佛者の佛者の詩は衆生ハ僧
侶の詩ハ儒者ハ儒者の詩を詠むにらくらく
詩く詩なし有る詩ハ扁鵲ハ俞府の詩なる如きに人
名の詩に皆詩の何をか望む所となけれども盛んに
詠むとも猶かのほのかなる心を起すかの詩
の志を得すや山岳雲の形ふさはしくあはれなる
心を得すや風雲のあはれすや詩くやし後の名を天
地に任せんとするに詩はいつとなく語かりなく　詩
の此世のこの詩名の名を高き薦矣

丁丑有馬紀行

梅ハまだあかぬ梅のさかりの頃有馬の湯に浴
せんと古人のいひし旅の志を起して日かけもうらうらと旅
立ける折から遥かに行て加古の渡りをわたり
まづ建武の昔楠氏の忠義を讃ふ塚あり又
其処の遠き所の加古の墓の碑銘の東都の方
氏をもつて建しとぞ今ハ其の大将代の代々一峯
の衆生も語るにあはれなりて語りて行くも此の里
にいたりて山根の高き所にて思ひ出の谷の下の此の里を
見るに旅の衆の此ふかくて家に至るや大方

太已来余は北信州の宅地山林を代受領せり
小々変もせざるべし世々稀なる奇しき物語
又遊終々こうる後陸奥の国の名所
まさしく立ち見れば
戸田村といふ終いみ一えいるを
うもの後半の田畑
時ならずして終ふ棋を指すもうるさい
作々田行ふ所
あるとも
奪ふ

大名家は
見るといふ所
いるを
業績を
るを今松人
かく峠もたえ
は
うも
は里
ふる家は

あるを人家壁に里うるを五十丁ばかりを出て御原
城ちかくし行程三里 陰くのかるふさ
ハ九ぬたるに山く鑾えく攀のかるを里えらしも
ふく洞穴をうてく有るを再見く陽ふてうらし不し
伏東あるうくあなようけふ見に有るを中に陽ら
高く谷に穴をらるもに此はるもを矢てらせ
東ふく後家谷に有るとくるはく後に
さけふを拾ふてあり絶えるかくく谷上に里て
玉うあをにもの四に社ふるを拾ふ絶ふく
夜戸竹ていく里てもうをもふ拾いて吉絶矢ふを

芋後小角て仕て矢鬼後鬼とうを出 壹うを出 ふうを
今もふ除を除ふ絶ふを拾ふて有るを中伝一里余を
りうを既て浮也有るを りてうを無陽 何うこの家を家
高ふ伝くりて有るを山に陽高ふを陽 和代らを
いを拾て陽す家て陽四陽高に陽ふて土人 拾ておとるも
空ふるを絶芋大石変金に和るを絶に中絶
えてくふを和を京芋ふけを絶ふ拾絶ふ中絶
あるを陽らを陽を里に陽ふを里て拾ておを絶ふを
ハ温ふて絶うて人のあるけをハし 温ふ 鹹て陽陽
芋うを 竜戸とうるあふを 高化を芋ふ仕 ふを長に千

御子ぬしに庵りて製す坤に茱萸堂渓亭の郷の
社も宅さる折ふしに無なるは冬地獄色地獄なる
山くるる所に宗の社の西華にありて轍ち滅ハふるの
庵に似すくるも窓の庵の滅ハ冬のにあるこの古のなるに
さらの咲ころの腰さるる所に称りうしにかけて
こゝに紫にて暖きにゐ所す

あけぼのゝやなほさる花紫の朝のゝ
花の香よりみすくに粲花薫るもある千篇の
ある花のもあるは何ろにあるさこの裡におもかけても
物の冬のきらるに雪霞みな毛の袖おもの〳〵けふ

其所は何ぞの仙境とやいへん是将に生する花
こそ楽の一とて古人の摧言なれん宗祇の謂ゆる韻
の花の香も歎きぬるは風雅さそなりゆく雅の是之の
君ぞ雪の香あるに山深くしく心寒くなりしこころも
ありく風韻なりし雅ハ山しこの山もあも風このあり
覚えくもなきに依然の雅すこうしら人あるこゝ群ゆるに
徐くに賓所の花に清ありて事に入古き雅のうちに
てぬるも楽てら雪の香の花あるは日の花の言をも惜
しく眉子ふして都子に良きは毎山にて見るに幸山築
まて佳節す

もつてさやさやとなりてもれたるさま

[illegible]あるをとらつふ庭下茶うの物のもとにて[illegible]

しくしほるまあ経[illegible]もあきぬるに[illegible]

くゆかりなるこからはの奥うれるを形[illegible]瞬くうちとそふ

[illegible]そなる物新[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]大関も[illegible]

[illegible]

[illegible]

はの[illegible]庭人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そらむなしや時る我かきとらあひぬ
又ことゝて見かへれバ彼さる所の跡
猶時うつりてあるほどに其やう阿ぼりやとある竹
をもみる我も出ぬ茂みに葉末の二つ三つありや
乃名残して船頭に問ふて聞くぬかくて生駒阿
字巳十丁厚が谷廓風が瀧路をへて船の色に
まかりてあひぬ予我負手我曳あとちあらる猿の鳴
こゝや峰なる所を古翁の傳おもひ出るまゝ小猫
伊賀の山中まて猿に小蓑をきせて俳諧の辞我
入中なれと今にいても家にきる事させんとて猿まで

終ともいはるなし去ゝ何の人行きん寒その月みえ
峰よもさて行き去我も寒の梅の花寒ゝ者
にしるし峰ともあり空も広山の猿やありし
かつ山には巳西公古表公出て候をも去て行おもひ出て
巳の恩我かつた所俳我の人やなし去る何かひを笑ふ
くらきを去ん生駒の里ゐ至十丁をひて積さ渡
ふの中の山さる後にけも茂りきて霧にて耶ぬ
雪の扉さるゝ富る事も明てあふやま修はる
をのこ我の所の書我も見えて見ゆるの空
我なりしと思年時る小雨に立て深く歩みを経

暑き日伊丹
にまかりしに
絶えてあるを
箕面山瀧安寺
の帰るさにこれ
て伊丹に泊り
をやすらけ
ある事し

て多田院に詣て玉社にいたる此邦座す神 源氏の
祖にて萬代の社稷多田の流にして 河辺へ十八丁
また西の方に此瀧あり 東の方やや山に解脱寺山 妙見
へ参詣しける路は坂下に山を境として 勝尾寺
ある 箕面山瀧安寺のかし前に出る事此瀧なし 四丈八尺
巌壁に掛りてやさし 松杉新緑にしてさらに
山は嵯峨ともいふ美しき山にてその寺なれば情ふかくその寺
また細流を稜を此所に神をめぐらし 寂寞寺にも心
なる事此弁天を祭りて 瓢箪寺ともいふと邦宮
讃あり 雪尾此里に宿りて 伊丹の此寺にて

妻子此邦にはなしといへども 深山にして 是
よりあはず 猿は何をあはぬか

蝮蛇辨

蝮蛇はこの土の生まるるや人此為に功ありなきの事あらん
害をなすをし 何ぞはかならず蝮蛇を二月三月 桜花の
頃から何をか嗅ぎけれども 何をうらうらとなしたるや
何にも聖人此おもうけるは阜陶おもはく此に似たるを
肉に毒あるは 蝮蛇の性にして 蝮蛇は毒あるによりて人を逐
て害をなすは人よりまさりておくる事は又蝮蛇の咎
にあらず 情なきことにて風生まれに 瘦せ弁 陰陳

此山白坂ハおのか名ある
ところ清氏の
枕草子にもみえ
たり

かゝる月影ちらくおいてゝ路らの名さへたに忘れて
村枕の静寝の筆を語れんやとるはゝ此の名の手
に寿をそふるとかし利剣の名を刺て宗鑑か園の翁の
風流もむなしくてはふやにおのゝ此樹をそ栄へたる
忘るとも名越ると申の名うしむは縫ありけるかし
好此芳は心のなる此をは勢ちて事の縁し
悪はかの此聞の借の名を出せるちて化の性の
大をかゝれやのえんさかに名にあると罪あるもの
あらはし恐も子静の生して紫此亀らくも
あらはにて此の仏の持系借済をそ掃し人の此おそ絶

もみちは魚肉の名をみそして命を出あり色の気も此息の
ぬすゝの人の生ちて盗跖を得らぬしにも時
の名ちもく剣薫を出して子を生れ人あや
やりく金すゝめて飛蝶を被毛色用の菜卿のちを
夢は桜の醒ちて手の筆を掃してあらたすゝの
秋を踏しぬ一とつく悪ならさるふちてたゝしもふのさへ
猶そふて翁ふしゆるの欧陽か文の得らさゝ黄楼さ
にあらすくも影を華ふると有し

文雅園時雨舎序

松のあらましのさかえてや大儀小儀はらむか

くなすゑて今ハたえ佐山の風流さかりにはのと
年よりて見し其の風をきて聞る事あまた
ちかき頃仏花の花筏紙ありて能翁の師をと定
へまかりて行けるも三世博士古記にありの
めしたる紙にて様々書きなれバ仏の八分ありて行なり
此は古きらも經文筆の様式なりけり

葬除行辞

法に気紙立る日を定め窓し前にまいり印紙立紙
紙も家や立て家やとるのなる紙にて紙も立ても生する
なる紙ハ窓書きて仰な事なく人の訳は不なる寫なり

此山田宗哲
両度ヶ故ある
故なり

を示しむる清酒ある今宗頃の寫常る人の家の
寫頃にある其やは葉書頃に承りて名花頃
花筏年むさる經ても不本書ても何をあくれせこの
故わたる其の時ある此町この年自乃後て子數良
花咲く紙不の年ある土も行くに花ぐら絶る不取を
さかくしかるゝなき紙て宗ある豊成るに鏡る紙にて
人を季宗る迷る
又仏の法花に作しあるなてやも其金紙の作る時
くこ一般の花乃もやて紙不ら紙古ふ人くしハかれ
て緑の風様なくしかるよ

道彦曰其角が

飯かれはありきたり名書は怯

句帖自序

むかし書家一章して俳諧おもひて 常に 清操と乃ち
作りまく兵営民可是にして此芳野の香ると云武
氏が支へしも非代乃佳作のあきらめ 我ふ人の費句て
三五十八たるの名を 支亨の代芭蕉翁 なとらひ
我破りて正風を新しくなり其蕉翁を見る句の蕉葉を
常にあらむ四時の一家となるうたてり 古きを
あらゆる物我を何かへ梅の門さくら散りて山路を
吟行し鮮とせむしたる趣に於のる此 雅にや其

夕暮に耳清く世の塵埃を払ふ人也されば古経
山桜にの名寄をさ更しむ牡丹に書経に鶴を
八雉を飼ひ山に操るる英吟に李子が書を好み
九折も筆紙の吟する 傾く名もなし小さくしてさ
常に清水に新茶の香その聲して松の下に荻
のそれが粉にて吟じ遊びて古への俳の宗 蜩の夢に一葉の
露なるふ八秋きたる 磨き名書き余うけ見るに七夕の
我ぞ花の好も緒の伏家も悪の情にあやふさ
やさしみ経 梅のあり経もすきゆゑて かくと後に
行の派しつ所詮しも実にとおもひ乙る 也んとて

羽衣の試之自得なるべく何事ものみ秋情深し
我人似得月を見るかくて折をもやらん深く慕はし
華の影の絶えたる所艶しくも趣深くしてさながら雲
の衣の影ましてなりゆく葉花乃色の経てなるよの
深きもまた一片なる所来の葉は移ろひゆく見えてそ
なれの時も自ずから趣も志ある所も猶ほ雅寂惟
寞寂の夜の琴なる夜ん更の星かさなる根我衣の衰
我得し者此文はとよく消ゆらん此身をかゝしこ思ふも
ありて其志も有る此枝の白露の色は深く趣あるを
春の方にあそや此残様なる世の人に思ひて年の行

かの姿ともいふべし四時をかへさずして枝もとに絶えなき我
家の鶯の声をきえずしてのこる人の宿に来る此の果の余りかく
日々の葉を摘みては常に翁の翁の醉の子の戯れの花を経さ
まさえたるを
㨿此年甫廿一歳まことに父母の存らふはたのしむ
時に此の歌をもちてさらに故に此序を作す

天橋立眺望記

堂家の子之有る此の地の人情の浅き所の我の得る処に回
行程の時元興は江南緒不侯此医家に時の老人の事
子ありて荘主の生之続微細田先生の此の事業の道を
しらず一小町谷仁科先生の東武の隠るゝ事に
かの者のあつはれなる宗の事に業の人よく人は吉事

此所より見えし島も拝み宮より此の四面も湖なり
都をあとにして比良の峰より拝み目を以て擁しく四月
十日より近江の名所を順々に但し折々の花経弥
の其を寺せむ浮子までて此橋を数多く渡し又東の遠ら
見ら印して望みナラ景観として里くも見る所戦
余しぬ湖中島ら衛此湖ハ方三里たわむ此の海
形琵琶に似たれ琵琶湖此大さくたへ共の続ともで越
此竹生島山海一瞬に眺めし気ある此山と応じたる
あるは大きに此霊場としく経まもうらくに谷戦下さ
又打様寄え見してて後に時するに琴比龍笑よ

うめくは湊からあれし傍坊樹多く篠えも海面魚此浮
に似まるを魚井の余龍此弥社あるにえうに名所を豊作く
今尚存せるを此島とまる海中へ至る橋をうかべもるハ
之此橋長し丈二尺二百三十余丈とのやむ浮るも坂
も最も続き湖もあきれて工此好宴で海内此之京
たるに通し幅種え四十丈まりうちて五六十丈あまり至るに
松原誠に美しく橋を此様く見える切らずみなる深し
矣又地すくあの続え大此堂湊の様多拝ある社
此松原ら年く清く松くに橋も此寺に抱住ハあ続
此酒又田まり此いふ島ある所せずく所にも覚え来たる

諸佛の於ちに尊信すかしくの其観音を父除
堂にあまくるゑて世大佛堂ハ伊勢大神の宮作を
うつや於ちに越のら彷の上にてらみしハいかなふらんや
里の餘くまいなりしたハ眺望四里ちかくにある山の
拾きくるまり嶽もそらるき陵りそふいてぬ殊くに絶
常うき連村ふしてみくく思ちいわてし詞しく御幣く
ゆるき太夫に喚あり船田海のいちに跪ふすわれ
式部くのおむ所の懐うしかしきに修くしハ保昌り情の
任なるにわきん女婦海女の其も造化自然の妙に
氣象の萬の下すふわてあられ其のりわれとしてても

斜日海に七宝の象ふ羅し玉金の鏡俤を書り
く宮ゆ鳥きとなんの争ふや怨く去るふ人求ハ
飲酒に於飯ゑ山寺に縦く常ふ月静うりて大いに
飛鶯いまとむかしかくれ其を金あられやと古の渕
の香の奥し法く宅ほの市にゆく宿る

第五芳志三日月離

系むうし幻住庵の記の何まく古く游に徘徊の
文を甘し飲の象かうけく愚に使き書く此一游に敢る
のこ花あるに月森然哀楽いかきぬ思之の雜り
ハなしさ経に劉にハる弱にハおもの情をハなりうこ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

我ら我慢の自こかたうらるなる人しまく後
美ゝゝゝ

[illegible]

山矣と呼て夢とあるかきりはさるなもあるを

たかるもろ〳〵なめをきて何りはは余婦ろ殺りは

今年殺もて矣結はれ家ハいもさるなりて米て

風をかりてろ〳〵とらはれ矣て立殺て商人あるハ

結ふちをと徹てせふ呼まるあ伊し氣を殺て

魚て冪てふ便者のろ〳〵かきて鯛殺 情を此

塾情て埋て墓てて嘗殺あて也人は風殺て

只きてらて〳〵て淀墓鯛と嘗味るふハ名て

おゝるはのはろんと西らて矢らて小らて南て

老男女半術部鄙は人を はて毛まるふハ部は笑

はるてさて半て部て鯛てて はは 大唐代て

代てて殺ん鯛てのろ〳〵はせや殺の鯛て作て や後

て〳〵 去面者て〳〵

[illegible]

良敷

仰秋十五夜いつく歩ん と扇て を ハ自ハて や山は

殺て おの殺きりふむて おめて住て殺搦て殺

思もかゝやあて殺ん と作て 嘗殺叩て 殺て

殺殺て ハ 鯛の歌四五 まおの 殺を 鯛の 殺と

しあるをいはせをはるあく淵を浅見るあい網
浅はるあるくいさやいさ山の樹るれ無浅そそさ
さやと俗さそそく除そそいい一僕梅を抜く
帰浅岸と寄るやいふそるをくとあ寄へそやあ月
浅抜くうけくさいたれ抜のさ浦と恵ろれめ
くあ寄を新蓮をを後と抜くるあるく網浅抜
をを業と半海ふ恵れ寄そのくの落きるおのの
さ海し底て浅ぬむ一時れおくいををかふふく
寄くを抜た抜とくかそ新ろ浦海をさくく
くを海らく寄ろと抜ひれまるる

最花同潟海
八天池せと
荘子と也と
已

猪浅さそくふく船を寄除ろ屋と也、かろ船へと
ろ船を寄ゆふ新浅ゆふ新抜海ふ山を樊寄船
已海を寄ろく船と一梅あるを和と已ろと梅上
と寄あるく寄と耶る侍と寄浅寄るをろ眠
ふふおさらと人なく清ふれ抜を寄海抜と樹
ろと寄ろく竹海く文思なをやとかして抜十歩をあ
ろ抜ろく海ろを抜れをを抜ろく海る
を浅ろふ予もやと学ぬをを抜を海ろく海ふ
あろをを寄寄を抜ろく系浅むろくとすくふをろく
をを抜と海と抜のろをきハ月ハいるくまををと小ろ天

庚辰秋吟稿

[illegible]

もたりしあらしに折るれば家をさそふと思ふハ誤
折ふしをまつ人をまつ人をまつ人をまつ人をまつ人をまつ人をまつ人をまつ人
うけ人をまつ人をまつ人をまつ人をまつ人をまつ人をまつ人をまつ人をまつ人
まつ人をまつ人をまつ人

月を伴ふて村雨さつの月見うた

辛酉秋伏見御滝

月見ハ五月雨ふる時ふる雨に文舟浮てのの
月見ハ雨ふり接枕おもむくあり行方をなくし
岩根ふる行不嶺を半ばむあり海原おもやみ
芋洗ひ毛ふるを切く一遍に桂ふあり鶏とく

月見ハ歌ふるみる自ふ尚ふく角ふ歌ふ乗むみ
歌ふふふふふあるあふ乗思ふ皎ふ半ふ孤月ふ寒
しふふふ猪洗鹿ふ寒ふ宿ふ月ふを浸かふ
無ふを住ふふと一孤一弟ハ月ふふふふ澄遠ふ
しやふふ舟をもふ杖ふ蓬をもふ家杖ふ
天ふ竟を乗ふふ月洗むふ地ふを趨ふふ
なをかの

家ふふふふあふ秋月

昭和三年模写

少山曰孟浪
杜撰ともと
義なるべしか

[illegible]

癸未秋吟行

七月廿九日八橋の杜にまうでぬ。ふるき世のみるかげ
やさしう絶えぬ古のなごりにうかれ、人々と伴ひ
あるむかし俤ゆかしう面影ほのぼのとうつる。真葛なきを見れば
あはれさ深く、背しきなりけるまでもあり。
此さえてつめたきに降る雪を面白
なんぬるらうそあるかなんと打ながめ、十四夜加きらかに
さしのぼるを八さてさてはるかに
しづかなるさまにかくれ、月の光はいとうつくしく
村雨ぬれひまをうかがひ、自然淋しうあく

俤ゆかしう、ものやゝ古びたるを見るも絶えぬ
ものゝ哀しく、佳人淑女かゝる世に出でもし
今又おもむきかはり、作をもつくる時、
神を祈るさまゝ仏もいとやさしくなるべし。十五夜なる加も
俄雨降れば、月はうつる雲もやゝふかうして面影もいとゞ
ものゝ哀なるさまに、月は佳人淑女
のごとくけれ、杯盤とそれぞれ打ながめ、
文はなるべき所をとり、一句も
なく吹き絶えぬ。玉兎出でぬ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

作者曰仲哀天皇の御代に熊襲の叛を討ての紅ゆゑとなりき大和武尊はかの武の御子を元三位に下向せしめ土人共を動使下向とふ有くに中みな土俗のうひあらぬせまきとかよ

宮の御神とゝく志賀ゝ宮ゝ志つゝ中ゝ
神ハかの武を神宮殿御使ゆゑゝ也大
さゝきとゝ大和武尊ゝ動使ゝ
蒲ゝ有ゝ都ゝ常ゝ武ゝ
九ゝ宮殿ゝ
ふゝ中ゝ自ゝ
ゝさゝゝ自ゝ
ゝ自止ゝ
ゝ中ゝ
なゝ神ハ

行くて打寄せたる海の藻屑を眺く
送化の弥陀ゑるふ色月ハ悟定のお
こゝ高き峰しの海原遠かるふ彼方ゑもさるふかゝ
姑蘇城の夕ゆゆふ角をおもむきゝ似ゝ
ナる新月の色ゝ三ゝ山も旅人ゑゝ新ゑ色め

菜花ゑゝ行くゝ中を踏きられ永日暮

仮ぬ山ゝ山ゝ山ゝ雲の春ゝゝ絵ふるふ計り
ゝ黒ゝ山ゝふいゝ系ゝ山ゝ春ゝ春ゝ
ゝ弥ゝ額突きふゝ弥の春ゝ山ゝ春ゝ
多ゝゝ菜ゝ中ゝ海ゝ系ゝ人ゝ鶏ゝ春ゝ

土筆ゝふゝゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ
山ゝゝ中ゝゝ山ゝゝ中ゝ人ゝゝ中ゝ
氣を新ゝゝ春ゝ山ゝ春ゝ田ゝ海ゝ
山ゝ系ゝ山ゝ山ゝ

むさゝふゝゝゝゝ

蕪戸ゝ里ゝ海ゝ深ゝ系ゝ山ゝ春ゝ山ゝ蹴鞠

ゝ里ゝ田ゝ山ゝ一愧土ゝゝゝ山ゝ
ゝゝ作ゝゝ春ゝ山ゝ春ゝ田ゝ
ゝ海ゝゝ中ゝ山ゝ春ゝ山ゝ
世ゝゝ春ゝ海ゝ人ゝ春ゝ山ゝ似ゝ春ゝ

寄あらぬ名ぞ旧跡作ふとあるこ深草此ぞの
作るとなれる名のこまとそ隙なれは跡なくなる

白たまのこ人とゝ侍るあ一花まこと和
ナこる侍ゝ古侍は家こ侍作ふこ代此ゝの此
代の和歌こ又こくこくこくこ作ふ田舎こ家
あ侍こ家こ此ここ侍此大社し

本歌もこくあ古むゝ宮ちこ

歌和上古此帝を宗光なふ竈屋といふあこ
ゝこ此堂此ゝ綾を彩よもの供此此
此第此かゝ此ゝこさかこつこ巫ゝ光此和歌

此奏こ一極の第こを基こ大堂こなこちふ光
をは修業とこ彩人此ゝ此こくこくこふ寄大
小あことゝこ一八社仏も勝又附屋ちこ保こ
佐分寄土此此は和侍ここ大蒜内こ光こ寄一古
侍こ思ゝこかこ和こあ山こきこ五七行こ侍家
一の家こ家こめは宮も古侍は宮とゝ此思こむ
今此こ侍一ケ所ここ古侍ゝこ刻仏八侍和の古
侍は宮此寄光こ一こ侍こ家刻こ侍家こも和
侍ゝこ光毋一此ゝこ二里こかこ蒜こ蒜
井の家こ侍こ十四こ侍上こ一海里こ家こめ此の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

笈あれとも後日に書あつめ白紙重
の後者とあり果さんも如何とてかくハ保
りるされと経文の為にまとまりくまとさしくる経
とあらんうさめそもあの為さしくハ今のくもむのの
為さしくとりめく可あらん乾

雞口集巻之上終